キズナエピソード

槍水りり　5話

//ヴィジュアルノベル形式開始

//とびお自室

「親に心配かけんな。きちんと、けじめつけろ」

俺の言葉を受けて、りりは自分のスマホを取り出した。

母親に連絡しようとしているのだろう。

//次ページ

「じゃ、俺は夕飯の後片付けしてるわ」

家族同士の問題に首を突っ込むのは気が引ける。

俺はさり気なく席を外そうとした。

……のだが、服の裾をりりに掴まれた。

//次ページ

りりは俺を見上げ、首を横に振っている。

行かないで、ということらしい。

「……わかったよ」

仕方なく、俺はりりの隣に座り直した。

話し合いが終わるまで彼女の傍にいることにした。

//次ページ

「もしもし、お母さん？」

「りり？　りりなの!?　もぅ、どうしたの！

何回も電話したのに繋がらないから、心配したのよ！」

「うん、ごめん……着拒にしてたわ……」

「大丈夫？　ちゃんとご飯食べたの？　きちんと寝てる？」

「うん、大丈夫だって。心配しすぎだよ」

//次ページ

「……ねぇ、りり。りりが家出した原因って、やっぱりあの人？

　ごめんね。私、りりの気持ち全然考えないで……」

「そうだけど……そうじゃない」

「そうだけど、そうじゃない……？

　りり、一度きちんと話し合いましょ？

　だから、帰ってきて」

「……わかった」

//次ページ

その後、二言三言やり取りした後で、りりは通話を切った。

俺の服から手を話し、その手で涙を拭いとる。

「ほら、ティッシュだ。鼻かめよ」

「うん、ありがと」

りりが大きく鼻をかむ。

そして、吹っ切れたように立ち上がった。

//ヴィジュアルノベル形式終了

//ADV形式開始

［りり］

「とびお、ごめん。やっぱり、今日は帰るね。

お母さんと、ちゃんと話さなきゃ」

［とびお］

「おぅ、行って来い。

で、スッキリしたら、また連絡しろよ？」

［りり］

「うん。……行ってくる」

［とびお］

力強くそう言って、りりは家へと帰っていった。

//暗転

//りりの家・リビング

［りりの母］

「おかえり、りり。

それじゃあ、きちんと話し合いましょ」

［りり］

「うん。じゃあ、言わせてもらうね」

［りり］

「……お母さんは、何考えてるの!?」

［りり］

「お父さんとの関係もきちんと終わらせないままで、

新しい男を連れてくるなんて！

だらしないお父さんみたいなことしないでよ！」

［りりの母］

「……りりが怒っていたのは、そういうことだったのね」

［りり］

「お母さん、はぐらかさないで、ちゃんと答えて」

［りりの母］

「えぇ、答えるわ。

りり。お父さんとは、きちんと離婚の話を進めてるの」

［りり］

「え、そうなの!?」

［りりの母］

「ちょっと前から、やり取りしてるわ。

正式に決まってから伝えようと思ってたんだけど……

りりにはきちんと言うべきだったわね。ごめんね」

［りりの母］

「あの人のことも、りりに早く紹介したくて

連れてきたんだけど……早すぎたみたいね」

［りりの母］

「私が先走っちゃったみたい……りり、ごめんね」

［りり］

「……そう、だったんだ」

［りり］

「……お母さん、アタシこそ、ごめん。

お母さんの話も聞かずに、一方的に怒っちゃって……。

心配かけて、ごめんなさい！」

［りりの母］

「あらあら。

珍しいわね。りりがこんなに素直になるなんて」

［りり］

「へへ。アイツのおかげ、かな」

［りり］

「アタシを泊めてくれた友達がね、叱ってくれたんだ。

親に迷惑かけるなって。けじめをつけろって」

［りりの母］

「そうなの、いい友達ね」

［りり］

「そうだね、

あんな良いやつ、あんまいないよ」

［りりの母］

「その子のお名前は何ていうの？

今度お礼を言わせてもらえないかしら」

［りり］

「名前？　とびお、だよ」

「りりの母」

「とびお……って、男の子!?

男の友達なの!?」

［りり］

「ちょっと、なに驚いてるの。

アタシに男友達なんて、別に珍しくないでしょ！

彼氏の話だって、何度かしたじゃん！」

［りりの母］

「そうだけど……初めてじゃない？

りりがそんなに楽しそうなの」

［りり］

「え？」

［りりの母］

「あなた今まで、彼氏や男友達の話をするとき

つまらなそうに話すじゃない」

［りりの母］

「そんなに楽しそうに……ううん、

そんな誇らしそうに男友達のことを話すなんて、

今までなかったわよ」

［りり］

「そ、そうだっけ？」

［りりの母］

「ふふっ。

もしかして、その子はりりにとって

特別な男の子なのかしら？」

［りり］

「え、いや、そんなこと……。

アタシととびおは、ただの気の合う友達で……」

［りりの母］

「あらあら。

りり、顔が真っ赤になってるわよ？」

［りり］

「へ？　いや、そんな……アタシは……」

［りり］

（え？　な、なんだろ、この気持ち……？

アタシにとって、とびおは――）

［りりの母］

「りり、どうかしたの？」

［りり］

「な、なんでもないっ！」

//ADV形式終了

//5話終了